

パンジャール州ルディアーナー市に おける出稼ぎ工場労働者

宇佐美 好文

はじめに

労働市場を通じた農工連関の核をなすのが労働力移動である。パンジャールは農業・非農業とも州外からの移動労働者に大きく依存しているといわれるが、その規模は明確ではない。そこで、ルディアーナーの男子労働力の出身地別構成を試算して、州外からの移動労働力の規模を探ってみよう。ここで男子労働力に焦点を当てるのは一般的に北インドでは女性の労働参加が低いからである。人口センサスと全国標本調査（NSS）人口移動調査結果（二〇〇七〜〇八年）をもとにルディアーナー県都市部の出身地別男子労働者数を推計すると、地元労働者三三万八〇〇〇人、近隣農村からの通勤九万二〇〇〇人、州内移動二万九〇〇〇人に対して、州間移動は三〇万四〇〇〇人となる。じつにルディアーナーの男子労働力の四

五％は州外からの出稼ぎ労働者である。さらに他州からの短期移動労働者が二七万六〇〇〇人と推計される。つまりルディアーナーの産業はその大半を出稼ぎ労働者に依存していることが分かる。しかも移動労働者の出身地をみると、ウツタル・プラデーシュ州（以下、UP州と略記）とビハール州がその大半を占める。

このようにルディアーナーを核とする労働市場を経由する農工連関というとき、それはルディアーナーと遠く離れたUP州やビハール州の農村との連関ということになる。これは我々のいまひとつの調査地、タミール・ナードゥ州のティルプルと大きく異なる特徴である。ティルプルでは周辺農村からの通勤と近隣諸県からの移住労働者が大多数を占める。この違いの背景にはパンジャール農村社会の特異性がある。パンジャール

農村社会のカーズト構成は、大別して農地をほぼ独占しているスイク教徒のジャット、土地なしの労働世帯の指定カーズトと職人・サーヴィスカーズトからなる。農業部門から非農業部門に転職・就業するとき、ジャット・スイクは工場労働者を社会的地位が低いとみなし、公務や商業・運輸業などの自営業を愛好する。土地なし農村労働世帯は建設業やサーヴィス業の労務に従事するが、工場労働者は少ない。このため、ルディアーナーの産業発展は州外からの出稼ぎ労働者に大きく依存せざるを得ない構造にある。

以下、ルディアーナーで実施した出稼ぎ労働者調査結果の概要を示し、北インドにおける労働市場を経由する農工連関の意義を考えよう。ルディアーナー出稼ぎ労働者調査は二〇一二年五月六月に、工場地帯・その周辺の労働者

コロニーを調査地として選定し、居住する出稼ぎ労働者のうち、工場労働者に限定して標本を抽出し、調査票を用いた面接調査を実施した。標本数は四六九人である。

●出稼ぎ労働者の属性と移動パターン

出稼ぎ労働者四六九人中、九五％がビハール州とUP州出身である。この両州は、二〇一〜二〇一二年の一人当たり州民所得（NSDP）がビハール州は二万三四〇〇ルピー、UP州は三万一〇〇ルピー（全国平均は六万六〇〇ルピー）、農村貧困率はそれぞれ五・三％、三・九％（全国三・八％）と、インドの最貧困州で、古くから大量の州間移動労働者を送り出してきた地域である。前述



労働者コロニーでの聞き取り調査風景



女性の労働参加は低い、内職するケース。子供が手伝う

のように、製造業労働者に占めるパンジャープ州内移動および近隣諸州からの移動が非常に少ない。現地での聞取りによると、商業や運輸業、家事サービスなど他の産業部門では州内や近隣諸州からの移動が多いとのことであった。

ルディアーナーへの移動年をみると、一九八〇年代が一四%、一九九〇年代が二五%、二〇〇一〜〇五年が二〇%、二〇〇六〜一〇一一年が三一%である。また、二〇一〇〜一二年に移動したものが三七人を数える。古い移動者には帰郷したり、他へ移動したものがいると想定されるので単純には比較できないが、ルディアーナーの産業発展が加速した一九九〇年代以降の移動者が多いことが分かる。工場経営者への聞き取りや新聞報道によると、近年パンジャープ（農村部・都市部を含めて）への労働移動が減少していると言われる

が、我々の調査結果からは、それを確認できなかった。

出稼ぎ労働者の性別年齢階層別構成をみると、男性が圧倒的に多く九三%を占める。これはティールブル調査結果との相違点のひとつである。一般的に北インドでは女性の労働参加が低いことは良く知られている。家庭内の内職でシヨールの端系処理の作業をしている女性がいたが、これも一般的ではなかった。年齢構成は一五歳から五五歳に分布するが、比較的年齢階層が高いのは古くからの移動労働者であろう。若年層は未婚が多いが、二五歳を超えるとほとんどが既婚である。しかしながら家族と同居するのは一一%にすぎず、圧倒的多数（八二%）は労働者アパートの一室を知人・同郷者などと共同で借家して共同生活する単身世帯である。一部の家族員と同居し、他の家族員が故郷に残るといふタイプも二六%を占めた。家族を呼び寄せて居を構えるといふ労働力移動を「定住型」と呼ぶとすれば、ルディアーナーの出稼ぎ工場労働者にはこのタイプは少なく、家族を故郷に残す「単身移動」が主要なタイプだといえよう。このタイプの労働力移動は生活の拠点を故郷の村に残している。

出稼ぎ労働者の学歴は低い。近

年の教育水準の向上を反映して、前期高等学校（二〇年）卒が四〇%、後期高等学校（二二年）卒が一三%であるが、「学校教育なし」（二二%）を含めて「小学校卒業まで」が約三割を占める。NSS人口移動調査結果によるパンジャープ都市部への州間移動者の学歴（無学二四%、小学校卒三四%）と比較するとかなり高いが、南インドタミル・ナードゥ州の移動労働者（無学三%、小学校卒一五%）よりはかなり低い。高等教育を受けたのはわずか四%に過ぎない。これは高等教育を受けた若者の移動パターンが異なり、我々の標本には含まれなかったからであろう。また、技術教育を受けている者はほとんどなく、多くが職場で必要な技術を習得している。これはルディアーナーのオペレーターや鉄鋼・機械など製造業は必ずしも高学歴の技術者を必要とはしておらず、逆に低学歴・低賃金の労働力を必要としていることを示唆する。そしてこのことは無学や低学歴の出稼ぎ労働者にとって、ルディアーナー、ひいてはパンジャープは職探ししやすい環境にあるとはいえず、これがUP州やビハール州など貧困州からの出稼ぎ労働者が大半として移動してくる理由のひとつであろう。

出稼ぎ工場労働者にはヒन्दウ教徒が圧倒的多数（九三%）を占める。NSS人口移動調査結果によるとUP州とビハール州からの州間移動労働者に占めるムスリムの割合がそれぞれ一三%、二一%であったが、我々の調査結果ではムスリムは六%にすぎなかった。これにはスイク教徒が多数を占めるパンジャープ州の歴史的・社会的条件が背景となつていよう。

カースト構成は「他後進カースト（OBC）」が最も多く五二%を占め、次いでその他の中上層カーストが三〇%を占める。指定カースト（SC）が一四%とかなり少ないことが注目される。

次に、出身母村における土地所有状況をみると、本人が所有する場合とその親が所有する場合を含めて、出稼ぎ労働者の七八%は土地所有者である。零細規模が多いが、中・大規模土地所有層も含まれる。指定カースト・指定部族が少なく、土地持ちが多いという事実から判断して、ルディアーナーの出稼ぎ工場労働者の多くは出身農村における最貧層ではないと考えられる。移動の資金不足や移動にともなうリスク負担能力の欠如から最貧層の移動は相対的に少ないといわれるが、NSS第六四次調査（人口移動調査）結果による

と、指定カースト・部族や土地なし層には建設業、運輸業、サーヴィス業などの労務に従事する短期移動が多い。最貧層には長期の工場労働者としての移動は相対的に少ないといえるかもしれない。

ルディアーナーへの移動プロセスをみると、出身地から直接ルディアーナーに移動したものが六一%、出身母村を離れて、一定期間他の地で就業し、その後ルディアーナーに移動してきたステップ移動は三九%を占める。デリーが主要な前住地である。このようにUP州やビハール州からの出稼ぎ労働者には少しでも賃金水準や労働条件の良い職場を求めて転々とするタイプと、当初からルディアーナーを目指して移動するタイプがある。後者の場合には親類縁者・同郷者・知人などのネットワークを通じてルディアーナーでの就職可能性についての情報を持っていたのであろう。いわゆるソーシャル・ネットワークが移動先の決定、就職において有効に機能していると予想される。

出稼ぎ工場労働者は短期の季節出稼ぎではない。年間九〜一〇カ月間ルディアーナーで働き、一〜三カ月は出身母村に帰郷するというのが一般的で、定期的に移動先と故郷を循環するタイプが支配的

である。出稼ぎ労働者の父親世代の労働力移動も高い。父親の四五%が出稼ぎ労働者であった。

●就業状態と雇用条件

よく知られているように、ルディアーナーは繊維衣料およびその関連産業のクラスターを形成している。また、鉄鋼、自動車、自動車部品製造でも有名である。この産業構造を反映して、出稼ぎ工場労働者の部門別就業構成は繊維衣料製造が四二%で最も多く、次いで自動車部品(二二%)、鉄鋼機械(一八%)、自転車製造(二%)である。ただし、これはルディアーナーの全就業者の産業別構成を示すものではないことはいうまでもない。

職種は、圧倒的多数(八六%)は工場で働く生産労働者である。その他に監督(四%)と労働者コントラクター(二%)が含まれる。就職方法は大多数が直接雇用である。工場の欠員募集広告を見たリ、知人、職場の同僚から情報を得て、直接応募したという。企業の受注変動への対応(労働者解雇)の容易さや製造工程のリスク負担回避などから、コントラクターを使う経営者が多いと予想していたが、コントラクターに雇用されているのは六三人(二四%)に過ぎ

なかった。鉄鋼業で二七%とやや高かった。

経営者にとって最も重要な労務管理のひとつに、生産性と品質管理をいかに高めるか、そのためのインセンティブと品質検査システムをいかに構築するかがある。賃金の算定方式がそのひとつである。工場の生産労働者の二三%は出来高給、七七%は時間給である。コントラクターは逆に出来高給が多い(七三%)が、監督はすべて時間給である。アパレル工場では出来高給の割合が三六%と相対的に高い。

出稼ぎ工場労働者の平均賃労働所得を推計すると六八〇ルピーである。産業部門別にはあまり大きな差はなく、機械・部品製造が七七五ルピー、アパレル工場では六九三ルピーである。工場労働者の多くが八時間労働ではなく、一二時間労働であることを考慮すると、この賃労働所得はパンジャブの半熟練労働者法定最低賃金率(四九一〇ルピー/八時間)とほぼ同水準であると判断される。言い換えると出稼ぎ工場労働者は法定最低賃金率のレヴェルの低賃金で雇用されているといえる。

賃労働所得は職種間でかなりの差があり、生産労働者の平均は六四〇ルピーであるが、監督は一五〇二ルピー、コントラクター

は最も高く一万七八九ルピーであった。

教育水準別賃労働所得は無学五四二ルピーから教育水準の上昇にともなって平均賃労働所得が上昇し、大卒では七五三ルピーとなる。一見、教育水準と賃労働所得の間に正の相関があり、教育投資が収益を生んでいるようにみえるが、これは職種の違いの反映である。

●故郷との紐帯

出稼ぎ工場労働者の多くは家族(妻子や親)を出身母村に残している。ここでは帰郷の度合い、送金、配給カード/選挙人名簿の発行場所を手掛かりに、故郷との紐帯の強さを検討しよう。これにより移動が定住型なのか、いずれは故郷に戻る非定住型かを判断できる。一年当たりの帰郷回数をみると、一回(三八%)、二回(三九%)が大多数を占める。過去二年間に一回のみ四%、一回も帰郷していないのが六%である。三回以上は一二%、帰郷した時の滞在期間は一〇日から七四日と非常に多様であるが、一〜一・五カ月が最も多い(三四%)。これはルディアーナーでの仕事の有無、故郷での社会的活動や就業などに依存する。帰郷時期や滞在期間は必ずしも農

作業歴とは関連していないことは注目される。

大多数の移動労働者は故郷に送金をする。送金なしと回答したのは一五・八%に過ぎない。定期的を送金している三七〇人の平均送金額は二万三三〇〇ルピーである。平均賃労働所得は六万六三三二ルピーであったので、およそ三分の一を故郷に送金しているというのが平均的な姿である。ただし様々な要因が錯綜しているので、送金額には非常に大きなばらつきがある。

送金あり出稼ぎ労働者三九五人のうち、五七%は銀行、一四%は郵便局を使つての送金であるが、一部にはインフォーマルな送金システムを利用したり、帰郷時に持参するケースもある。

出稼ぎ工場労働者のうち、ルディアーナーで発行された配給カードを持つ者は一〇%で、六一%は故郷の村にあるという(二九%は配給カードなし)。ルディアーナーの選挙人証明書を持つものは四九人、故郷の村の選挙人証明書を持つ者は二六八人であった(二四九人は選挙人証明書なし)。これらの事実は、出稼ぎ労働者は稼得のためにルディアーナーで居住しているが、家族の生活の拠点が出身母村に置かれていることを

如実に物語っている。

●おわりに

以上、ルディアーナーの出稼ぎ工場労働者の実態を概観してきたが、これから何を読み取ることが出来るだろうか？ 出稼ぎ工場労働者のほとんどはインドの最貧困州、UP州とビハール州の農村出身であった。これら農村からの出稼ぎ労働者の多くは短期的な季節で稼ぎではない。ルディアーナーで年間一〇カ月ほど就業し、一〜二カ月間故郷に戻るといふ循環型ではあるが、長期にわたる労働力移動である。しかしながらルディアーナーで居を構えて家族を呼び寄せて生活する「定住型」ではない。家族の生活の場を故郷の農村に残している。出稼ぎ者本人も帰郷した際には社会的活動や農作業に従事するなど、かなり長期に滞在する。つまりUP州やビハール州からの出稼ぎ労働者は「非定住型」なのである。

彼らの多くは臨時雇いではなく、常雇いの賃労働者である。コントラクターに雇用されているのは少数で、多くは雇用主による直接的雇用である。しかしながら安定的な恒常的勤務とは言い難い。雇用者に対する福利厚生は皆無である。需要の多寡によりいつでも

職を失う危険性を抱えている。賃労働所得は法定最低賃金水準で非常に低い。収入を増やすために、超過勤務がごく当たり前になっている。

居住環境は劣悪だが、故郷の農村よりもまだましかもしれない。労働者コロニーのアパートには共同の水道あるいは井戸があり、共同トイレがある。その一部屋を数人がシェアする。部屋にはヒンドウ教の神の絵が飾られ、テレビがあり、ガスコンロがある、しかしながら、異郷の地での社会不安はアパートの狭い入り口の鉄製のドアに象徴的に表れている。母語とは異なる言語での子供の教育も懸念材料のひとつだろう。

一方、母村には住む家があり、幾ばくかの土地を所有することから、いつでも戻るところがあることとの安心感がある。出稼ぎ労働者の家計と故郷の被扶養者の家計の二つの家計を維持することは非経済的ではあるが、家族の生計維持策としてのリスク回避の方策として合理性を持つのである。労働市場を経由する農工連関は、換言すれば農業労働力から工業労働力への移行であるが、ルディアー



労働者の住居、3m×3m程度の部屋に数人が居住する。カーテンがかかっている部屋は家族連れ。屋上にトイレ。テレビのアンテナがある

ナーの出稼ぎ工場労働者の実態からは、その移行は必ずしもスムーズではなく、過渡的な状態にとどまっていると言えそうである。

(うさみ よしふみ／東京大学 客員研究員)

《参考文献》

- ①NSSO, GoI, *Migration in India: July, 2007-June, 2008*, (NSS Report No. 533).
- ②Central Statistical Organization, GoI, *Economic Survey, 2012-13*.
- ③Registrar General and Census Commissioner, GoI, *Census of India, 2001, Series D, Migration Tables*.